

## キリストの日に備えて

フィリピの信徒たちへの手紙を読み進めております。今朝、わたしたちに与えられている聖書箇所は「フィリピの信徒のための祈り」の後半です。いまは礼拝時間を短縮している関係で説教も従来の長くても3分の2までに収めるようにしていますので、ここもお祈り前篇・後篇みたいに分割してしまいましたが、本来の流れに沿って読まないと分かりにくいので、もう一度、お祈りの最初の部分から読んでみます。こう始まります。

「わたしは、あなたがたのことを思い起こすたびに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るたびに、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで福音に与っているからです。あなたがたのなかで善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださるとわたしは確信しています。わたしがあなたがた一同についてこのように考えるのは当然です。というのは、監禁されている時も、福音を弁明して立証するときも、あなたがた一同のことを、ともに恵みに与る者と思って、心に留めているからです。(ここから先ほど読んだ箇所です)わたしがキリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証して下さいます。わたしは、こう祈ります」そして9節から、実際の祈り願いが記されます。こうしてみますと8節までは、なぜパウロが彼らのことを祈っているか、それがどれほどの喜びであるか理由が語られ、9節以下に祈った内容が記されていることが分かります。

第一のポイントは、この手紙がなぜ書かれたかという動機に関わります。大きな理由のひとつはパウロが福音伝道の結果、監禁されてしまったからです。いまパウロは獄中にいる。これ

は世の中の人から見れば状況が詰んでいるわけです。フィリピの信徒たちにしてみれば自分たちを福音へと導き、新しい人生の扉を開いて下さった指導者の終わりと見えたわけですから、そこに不安や心配が当然あったでしょうし、ひるがえって自分たちの身の上の心配もしたでしょう。しかしパウロはみずから捕えられた事実を別の角度から見ています。それを伝えるためにこそ、この手紙が書かれたといってもよい。泣きごとを言っていないのです。後悔もない。ここで重要なのは、フィリピの信徒たちに、わたしではなく、神が、キリスト・イエスの日までに、あなたがたの中で始められた業を成し遂げてくださる。完成してくださるのは神だと、パウロを思ってうつむきがちな彼らに、イエス・キリストを通して神を見るように指し示していることです。パウロにおいては出来事の主語は神であり、キリストなのです。ここは大切なところで、わたしたちが現在おかれているコロナの状況もこれに少し似たところがあって、いま病院に入院したり、高齢者施設におられる方は移動が制限されています。またこちらからの訪問も制限されていて入院してしまうとお祈りにいけない。枕もとで聖書を読み、会話をし、祈るといふ魂の慰めをすることができない。行けない状況、会えない状況、これはまさにパウロとフィリピの信徒たちの置かれている状況です。信徒たちにしてみれば、パウロ先生のごことが心配でならない。悲しくなってくる。しかし、パウロはへこたれてはいない。それどころか、この手紙は獄中で書かれた喜びの手紙なのです。なぜ喜べるのか、それはパウロが成し遂げて下さるのは神だ、ということを知っているから。人間には完成はない、かならず終わるといふ当たり前ですが、わたしたちが受け入れがたい真実を、キリスト・イエスに結ばれることによって受け入れているからです。ここをパウロは見て取って欲

しくて手紙を書いているのです。人間は未完成で終わる。死という限界があらゆる被造物に設けられている以上、必ず終わりが来る。終わらない存在はない。ならば死に定められた存在はみな悲惨で、哀しいかというパウロはそうは考えていない。なぜなら、永遠で全能をお持ちであった方が、この一瞬で飛び去ってしまう存在に全身全霊で関わり、命を投げ出して下さった。滅びゆく存在を贖って下さった。つまり愛してくださったからです。パウロの救い主であり、わたしたちのキリストである神の子によって復活の希望が与えられたからです。この福音の出来事は神が始められたことですから、神が完成されるのです。パウロはこの大きな神の御計画の一端を担っているに過ぎない。そしてそれはフィリピの信徒たちも同様なのです。この福音という中心に与っていることが喜びであり、感謝なのです。だからキリスト・イエスの日までに、主が再び来られる時まで、神が始められた善い業を神が完成されることを信じる事が出来る。それに備えて生きることが、人間パウロに出来る精一杯のことであり、あとはお任せなのです。わたしたちの確信は、それが福音に、キリスト・イエスの出来事に与っているならば、神が必ず必要な助けを与えて下さるということです。旧約聖書の時代から今日に至るまで永遠に生きた人間はいません。ユダヤ民族は幾度も滅びかけましたし、キリストを信じる者たちはローマ帝国下でも迫害の対象でした。しかし、教会が滅びることはなかった。パウロの働きを継ぐ者も与えられたのです。だからいまここで礼拝が守られているのです。それは永遠と力をお持ちの神がキリスト・イエスの働きを通して、限られた命、限られた能力で生きるわたしたちに恵みを注いでくださったからです。イエスを主と信じて生きる者たちと共に歩むことを約束して下さったからです。このことをパウロは確信しています

から平安なのです。福音に与っているならばすべては良いのです。パウロは自信によって生きているのではないのです。確信をもって生きているのです。この違いが分かりますか。自分を信じているのではない。自分の力や、可能性に立とうとしているのではない。わたしのうちに働くキリスト、神の力を信じているのです。わたしという小さな人間をも用いて福音の器として下さる神の働きに信頼をしている。わたしのでも、フィリピの信徒のでもない。尽きることなく恵みをくださる主が用いて働いてくださることを確信している。神は御自分を偽ることができない。真実な方です。この神さまの確かさに支えられている感謝から、喜びが湧いてくる。そしてパウロは祈ります。「知る力と見抜く力を身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」、パウロは第一に、「知る力と見抜く力を身に着けて、本当に重要なことを見分けられるように」と執り成しをします。福音以外の、世の中で頼りになりそうに見えるありとあらゆるもの、つねに自分の中にあるものによって立とうとする罪の誘惑、そうしたものを正しく見抜く力、弁える力を得ること、信仰によって物事を見分ける視力を得ることが大切なのです。自分でするのではありません。その力を神に願うのです。あくまでもパウロは、神を主語として語り、行動を起こされるのは、救いの働きをなさるのはわたしではなく、神だという根本をゆるがせにしません。わたしたちは、このパウロの祈りから、誰かを愛することは、その人のために時間を割いて祈ることだと教えられます。パウロは祈りに入る前に、8節で、わたしがどれほどあなたがたのことを愛しているかは、神さまがご存じです。神さまが証人なのだと言いました。パウロの時間、それは地上で貸し与えられている限りある命のことですが、それが他者のために豊かに振

り分けられている。与えられた時間が、能力が、相手のために用いられている。そこに愛があります。キリスト者にとって愛することは、相手のために祈ることだという姿勢を学びたい。その人のことを思い、創造主である神様の御前に出て、執り成しをし、祝福を祈る。ここに非常に尊い、神の民の働きがあります。わたしたちは主イエス・キリストに結ばれていることによって、神を父として肉親に頼るように祈りをささげることが許されている。そのとき、神はご自身の恵みにおいて離れた者たちをも結び合わせて下さる。そのことをパウロは確信しています。現に、わたしたちの心は通じ合っているのではないかと喜ぶのです。ここに福音という神さまがキリスト・イエスにおいて起こして下さった出来事によって、牢獄のなかにもくじけず、感謝しながら、フィリピの信徒たちのことを覚えて祈り続けている人間が浮かび上がります。こういう個所を読んでいますと、わたしの恩師である長津栄先生が福音に生かされる人間のことを、ノックダウンされることはあってもノックアウトされることはないと言われたことを思い出します。打ち倒されても終わりではない。神の愛が働いているから、死が終わりではなくなったことを知っているから立つことが出来る。苦難のただ中であってくじけぬパウロの姿は信仰のもつ耐え忍ぶ力の強さを示しています。この福音に与ることによって育てられるキリスト者の人格、生き方の姿勢を知って欲しいとパウロは願い、手紙を綴るのです。

最後に、アメリカの神学者ニーバーの祈りとされる有名なお祈りを紹介して終わります。言っていることはパウロと同じです。「神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。そし

て、変えることのできるものと、変えることのできないものを見分ける知恵をわれらに与えたまえ」

このように祈りながら進むことが許されるところに、キリスト者の平安があります。

お祈りいたします。